



おおはらへ 神話と大祓

みそぎする河の瀬見れば唐衣日も夕暮に浪ぞ
たちぬる
紀貫之

皆様は「桜散らしの風」という言葉をお聞きになったことありでしょうか。私はつい最近の天気予報で初めて聞いたような気がしました。そこで早速調べてみると、結構普通に使用されているようです。考えてみるとなぜ知らなかったのか不思議な気がします。それにしても今年の桜はすごいですね、咲き始めたかと思うとあっという間に満開になり、すぐに散り始めてしまいました。弥生神社のお祭りの頃にはもう終わっているかも知れませんね。桜の花のないお祭りは初めての経験で、何となく寂しく感じてしまうでしょうね。でも、皆様のお力添へのおかげで昨年にもまして賑々しく斎行されていることと思います。新緑の季節は、草木の息吹と共に世の中の移り変わりのエネルギーが伝わってきます。

毎年新年を迎えると初詣に始まり、御例祭という大きな行事を行い、六月の大祓へと恒例の祭事・行事を続けてご奉仕しておりますが、本年より新しく大きな事業を加えることとし、その準備に着手することになりました。弥生神社の御社殿は、御創建以来百年を数えておりまして、屋根の雨漏り・柱の虫食い・床の腐食などなど、部分修理では回復できる状態ではなくなってしまうました。歳旦祭や例祭など、多くの方が昇殿なさると床が落ちるのではないかと心配しています。併せて付帯する諸設備も不備が多く、御参拝の皆様にご不便をおかけしております。これから先、弥生神社が自立して運営できるように、五十年・百年先を見据えて整備したいと考えております。そのための基本的な調査を開始し、事業の計画案をまとめたいと考えております。素案ができたところで皆様にお示して、ご意見を伺いつつ進めてゆきたいと思っています。どうかご理解とご協力頂きますようお願い申し上げます。
(宮司)

目次

- 01 ごあいさつ
- 02 目次
- 03-05 神話と大祓
- 06 お宮の風景 ～お正月～
- 07 総代さんより
- 08 古今のうた「夏歌」
- 09 本を読む「神話の世界」
- 10 掲示板「神社のあれこれ」
- 11 シリーズ祭祀遺跡 第五回「高良山神籠石」
こうらさんこうごいし
- 12 授与品紹介・編集後記



弥生神社境内のケヤキ

ケヤキはむかし、槻「ツキ」といわれ、『古事記』や『万葉集』にもその名がある。万葉集には「斎槻」（「いは(わ)ひ(い)つき」「ゆ(い)つき」）の語も詠まれている。「斎槻」は“尊いケヤキ”の意であり、かつての人々がケヤキを神聖視していたことがうかがえる。（深津正『植物和名の語源』八坂書房）

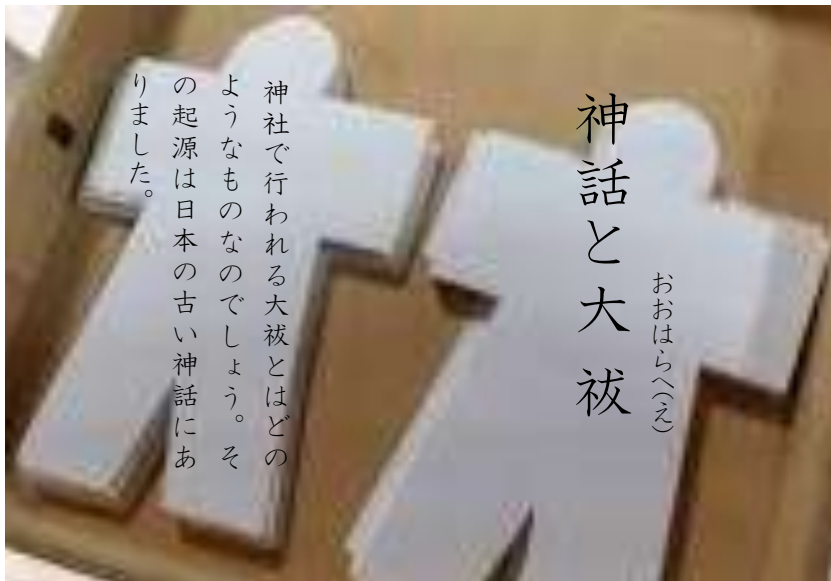
大祓とは

神社では、十二月三十一日の大晦日、半年後の六月三〇日に、大祓を行います。それぞれ「年越の大祓」、「夏越の大祓」といいます。

大祓は、生活の中で心身についた罪や穢れ、災い、過ち、病気を除き、清浄な心身に変えるために行います。

もともと宮中行事であり、のちに各神社で行われるようになりました。古い書物によると、昔は天皇がお隠れになった時や謀反があった時などに臨時で行われたとあります。大祓の「大」は公という意味で、社会全体を祓うための行事だったようです。

神社での大祓では、神職が『大祓詞』を奏上します。そして参列者は、祓具としての人形（形代）に自分の罪、穢れを移して祓います。この後、人形は神職によって祓われ、お焚きあげしたり、川に流したりします。



伊邪那岐命の禊祓

このように自らの心身を祓う大祓。その源流を伝える神話が、『古事記』にある「伊邪那岐命の禊祓」です。

★
伊邪那岐命は、亡き妻伊邪那美命を追って

黄泉の国に行きます。変わり果てた妻との再会と別れののち黄泉の国から戻り、「汚れた国に行ってしまった。御体の禊をしよう」と、笠紫の日向の橘の小門の阿波岐原に

て、禊をされました。禊は、身に着けているものを削ぎ、水中に身を投じ、身を振り濯ぎ、穢れを除去することです。伊邪那岐命が身に着けていたものを投げ捨てる（「祓う」

にもあたります）と、杖、帯、囊、衣、袴から次々と十二柱の神が生まれました。さらに御身を水で濯ぐと、黄泉の国の穢れから成るといふ禍をもたらす神、大禍津日神、

八十禍津日神が生まれました。さらに、禍を元に戻そうと、禍に打ち勝つ神である、神直毘神のほか三柱の神を生みます。↓

↓続いて、海の神である底津綿津見神、海

そこつわたつみのかみ

上交通の神である底箇之男命など六柱が生まれ、そしてついに、左目を洗うと

あまてらすおみかみ

あまてらすおみかみ

天照大神、右目を洗うと月読命、鼻を

たけはやすさのおのみこと

洗うと建速須佐之男命が生まれたのです。

このようにして伊邪那岐命の禊によって、もつとも尊いといわれる三神が生まれまし

★二

た。このち天照大御神は高天原、月読命は夜の世界を、須佐之男命は海原を治めるよう任されるのです。

『大祓詞』と祓戸神

はらうどのかみ

さて、『大祓詞』によれば、人間の犯し

せおりつひめ

た罪は、瀬織津比売によって川から海に運

はやあきつひめ

ばれます。続いて速開都比売がそれらの罪

いぶきどぬし

を飲み込み、気吹戸主が根の国底の国へ吹

き込みます。さらに、根の国の

はやさすらひめ

速佐須良比売がそれらを背負い、さすらい

ながら失わせていきます。こうして人間の

犯した罪は、これら四柱の「祓戸神」たち

によってすっかり祓われるとあります。↓

武田祐吉訳注『新訂 古事記』角川文庫より

★一 ここを以ちて伊邪那岐の大

神の詔りたまひしく、「吾はいな

醜め醜めき穢き国に至りてあり

けり。かれ吾は御身の禊せむ」

とのたまひて、竺紫の日向の小門

の原に到りまして、禊ぎ祓えたま

ひき。

★二 この時伊邪那岐の命大く歡

喜ばして詔りたまひしく、「吾は

子を生み生みて、生みの終に、三

はしらの貴子を得たり」と詔りた

まひて：天照らす大御神に賜ひて

詔りたまはく、「汝が命は高天の

原を知らせ」と、言依さしたまひ

き。

↓このようにして祓われる『大祓詞』における罪、すなわち「天つ罪」は、ふたたび『古事記』に戻ると、須佐之男命が犯した次のような罪の数々にあたるといわれています。

すさのおのみこと

すさのおのみこと

須佐之男命の罪と祓

★三

伊邪那岐命の禊によって生まれた須佐之男命は、任された海原を治めず、母のいる「根の堅州国」へ行きたいと泣いてばかりいまし

かたすくに

た。「根の堅州国」は、「根」すなわち「地底」の片隅の国、死者の行く国です。そのため伊邪那岐命の怒りを買ひ、追放されます。

追放された須佐之男命は、天照大御神の治める高天原へいとまごいに行きますが、農耕や神事の妨害という重い罪を重ねます。天照大御神はこうした須佐之男命の罪に悲しみ、

天岩屋戸にお隠れになりました。

天照大御神が再びお出ましになり、ようやく世に光が戻ると、集まった八百万の神々は協議し、須佐之男命に罪を償わせます。まず、祓具としてたくさん品の品物（祓物・贖物）を差し出させます。↓

★三 速須佐の男の命、依さしたまへる国を知らさずて、
八拳須心前に至るまで（長い髭が胸元まで伸びるまで）、啼き
いさちき。その泣く状は、青山
は枯れ山なす泣き枯らし河海は
悉に泣き乾しき。

★四 かれ天照らす大御神の出
でます時に、高天の原と葦原の
中つ国とおのづから照り明り
き。ここに八百万の神共に議り
て、速須佐の男の命に千座の
置戸を負せ、また鬚と手足の爪
とを切り、被へしめて、神遂ひ
遂ひき。

↓これらは、「大祓詞」で「千位置戸」とよばれるものです。さらに須佐之男命は、髭と手足の爪を切られ、高天原から追放されるのです。

この「須佐之男命の罪と祓」の神話は、「祓」の始まりの神話といわれています。そして、ここでは悪神として描かれた須佐之男命ですが、続くこの後の話において、みごとに再生を果たします。そこに「祓」の大切な意義をとらえることができるのです。

すさのおのみこと 須佐之男命の再生

高天原での大祓を経たのち、須佐之男命は、出雲国にて勇敢な善神として生まれ変わります。人々を苦しめる八俣大蛇を退治し、その尾から出てきた三種の神具の一つである「草薙剣」を天照大御神に奉獻するのです。そののち、この時助けた櫛名田比売と結婚し、大国主神をはじめ多くの神々をもうけるのでした。

このように「大祓」の源流となる「禊・祓」にかかわる神話をたどると、大祓には、自分の身を削ぎ落とし、清浄無垢にすることで新しく尊いものを生みだす。あるいは、自らの罪を償い、本来の自分を見つめなおし、再生するという面があると、考えることができるのではないのでしょうか。

【参考文献】

武田祐吉訳注『新訂 古事記』角川文庫（平成十八）／國學院大學日本文化研究所『神道辞典』弘文堂（平成十六）／岡田米夫『大祓詞の解釈と信仰』神社新報社（平成十七）／神社本庁監修『神話のおへそ』（平成二十）四／三橋健『神道の常識がわかる小辞典』PHP新書（平成十九）



平成二十七年 夏越の大祓

六月三十日午後三時より
どなたでも参列いただけます。



大晦日「大麻で祓う宮司と参拝の皆さん」



御祈祷のようす「ひと組様ずつ行っております」



お宮の風景
くお正月く



初詣「元旦は雪でしたが、のち快晴」



年越の大祓「皆で茅の輪をくぐります」



柏台キングスさんの「安全・必勝祈願」



御札所のようす



たーくさんの人が
参拝にきてくれま
した…びっくり…

ちよろ

今年も一月四日に初詣に行きました。まだまだ賑わう境内で、数人の知り合いとばったり会い、弥生神社が和みの場になりました、素敵な一年のスタートです。

年末に体調を崩し、二月に手術する母の為に「健康御守」を授かってきました。母に御守りを渡すと「初めてもらったわ」と、思っていた以上に喜んでくれてホッとしました。

そして先日、無事に母の手術を終えることができたので、今度はお礼参りに行きたいと思っています。神社の桜が花開く頃がいいかな…

金野詩暢

総代さんより

氏子総代三年生の想い出

伊関 隆

平成二十四年六月に弥生神社総代就任の話があり、一抹の不安がありました。現役をリタイアし時間的余裕も少しあったので、総代の委嘱を受ける事にしました。

これまで神社との関わりは、正月の初詣に故郷の鎮守様へ家族でお参りしたこと、子供の頃お祭りに参加したこと、ご先祖の年祭を神職にご奉仕いただいたことなどでした。会社生活では、工事の安全・交通安全の御祈願で神社に度々お世話になりました。

しかし、総代の役割など全く分からないままお手伝いが始まりました。最初に六月の茅の輪つくりと大祓に参列しました。十二月には、初詣準備と元旦の参拝者の対応を行い、四月の例大祭では御神輿のお供など経験させてもらいました。全てが初めての事であり、先輩諸氏の指示でただ動いていた事を思い出します。

今、三年生になりましたが、まだまだ自分の知識として理解するには至っておりません。皆様のご指導とご協力のおかげで何とかお手伝いできているのかなあと思っているところです。

総代になって良かったと思うことが三つあります。

「その一」、弥生神社の行事を通して地域の方々や、他の神社の関係者など多くの人と交流することが出来た事です。これからも神社の奉仕と地域の活動を通じて皆様と共に前進していきたいと思えます。

「その二」、千三百年の歴史ある伊勢神宮の第六十二回式年遷宮の年に「お白石持ち」行事に参加できたことです。大勢の皆さんと心をつなげて、「エンヤ・エンヤ」のかけ声と共に、おかげ横丁から宇治橋まで曳きました。宇治橋を渡ったところで、白い布に包まれた「お白石」を受けて、真新しい「御正殿」のすぐ近くまで進み奉獻しました。普段、絶対に入ることの出来ない「御聖地」に入り、光り輝く「御正殿」に感謝の念で手を合わせたことは、感無量の想い出となりました。

「その三」、御遷宮の後最初の「神嘗祭」で新穀を捧げる行事「初穂曳き」にもご奉仕することが出来ました。全国各地から集まった「御初穂」を、大勢の人々と力を合わせて外宮にお納めしました。引き続き、外宮から内宮へと「御垣内参拝」することが出来ました。

これまで式年遷宮のこと、二十年ごとに行われてきたことすら解らなかつた私が、遷宮の年に二つの大きな祭典にご奉仕する恵まれましたことを感謝しております。

これからも、弥生神社が皆様に親しまれる氏神様として、気軽に参拝して頂けるように、そして地域の交流の場になればと願いながら、微力ではありますが努力して参ります。どうか宜しくお願い申し上げます。

古今のうた 夏歌

みそぎする河の瀬見れば唐衣日も夕暮に浪ぞ
たちぬる 紀貫之

『新古今和歌集』 「夏歌」二八四

「みそぎをする川瀬を見ると、襖はすでに終わって人々は衣のひもを結っている。夏の最期の日も夕暮になり、夕波が立ってきた。」

『新古今和歌集』 「夏歌」の最後におかれたうた。「みそぎする」は六月晦日に川でする祓、「夏越の祓」。「日も」に「紐」、「夕」に「結ふ」をかけている。紐、結ふは「唐衣」の縁語。襖が終わり解いていた衣の上紐を結う情景を暗示させている。そして、夕暮になったので夕風が吹き始め、川浪がたったのである。

（波を詠むことで風の動きも伝わってきます。夏の終わり、襖の後の清々しく涼しい心情をも映しているように感じます。）

【参考】久保田敦『新古今和歌集全評釈第二巻』（講談社）昭和五十一年

龍神や湖に魅せられ登り来し杉むら森森なつを匂はす

高崎敦子『朧光亭日乗』（平成十八年）

よしあしは後の岸の人にとへわれは颼風^{うしろ}にのりて遊べり

与謝野晶子『青海波』（明治四十五年）

もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂^{たま}かとぞ見る

和泉式部『後拾遺集』雑六

梅の木かげのかわける砂に蟻地獄こもるも寂し夏さにけり

齋藤茂吉『あらたま』（大正五年）

あの夏の数かぎりなきそしてまたたつた一つの表情をせよ

小野茂樹『羊雲離散』（昭和四十三年）



松谷みよ子の 日本の神話

松谷 みよ子／[著]
講談社
2010.10

今年亡くなった児童文学者の松谷みよ子。「龍の子太郎」「ちいさいモモちゃん」などの作品で広く知られています。本書では古事記や風土記などに記された日本の神話を紹介。子どもから大人まで歴史との関わりを理解しながら物語として自然に楽しむことができます。

本 を 読 む。

「神話の世界」

子どものころ本で読んだり、いつの間にか耳にしていた神話。その豊かな物語世界は大人になっても大変魅力的に映ります。今回は神話の世界を堪能できる図書を選んでみました。

小河洋友

(東京都内図書館勤務)



はじめての日本神話

『古事記』を読みとく

ちくまプリマー新書173
坂本 勝／著
筑摩書房
2012.1

単なるファンタジーではない神話。「古事記」において古代の人々はなぜ見えない神々の世界を想像したのか。「自然」と「人間」の接点を舞台に読み解いていきます。「古事記」の全容がわかるあらすじ紹介つき。



神々と英雄が大集合！

世界の神話大図鑑

佐藤 俊之／監修
PHP研究所
2013.2

どこかで耳にしたことのある異国の神々や英雄たちの話。二匹のヘビを絞め殺した赤ん坊のころのヘラクレス、像の頭を持つガネーシャ…ギリシャ神話、北欧神話、メソポタミア神話そして日本神話。世界で語り継がれてきた神話をイラストとともに紹介しています。



子どもに語る 日本の神話

三浦 佑之／訳
茨木 啓子／再話
山崎 香文子／挿絵
こぐま社
2013.10

「天の岩屋」「稲羽の白ウサギ」「海幸彦と山幸彦」…子供のころに聞いた日本の神話。本書は古事記研究の第一人者とベテランの語り手が子どもが耳で聞いて楽しめるよう再話した全10篇を収録しています。読み聞かせに最適の一冊！！



西洋美術たんけん

第1巻
ごらん！神話と神さまの世界

池上 英洋／監修
日本図書センター
2014.10

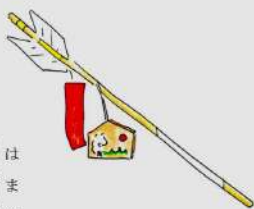
「子どものための西洋美術「超」入門」。おもにヨーロッパの名作美術品をエピソードとともに時代順で紹介しています。本書第1巻では古代から16世紀の作品を収録しています。神話が美術の重要なモチーフであり、豊かなイメージをもたらしてきたことがわかります。

神社のあれこれ

今年から境内の掲示板に、神社のあれこれがかかるポスターを掲示しています。その名も「神社のあれこれ」。テーマに関わる豆知識も紹介しております。Facebookなど、オンラインでもご覧いただけます。年末には年間のポスターをまとめた冊子も発行予定です。お楽しみに。

神社のあれこれ その一

はまや 破魔矢のはなし



はまや
えんぎもの
破魔矢は、お正月に神社でお分けする縁起物です。その名の通り、魔を破り、やぐさい はら
厄災を祓う矢として信仰されています。
一年間、神棚や床の間など清浄な場所に飾ってください。



まめちしき
豆知識

建築の上棟祭(じょうとうさい)のときに、鬼門の方角である東北と裏鬼門の方角である西南の方向に向けて、屋上に二張の飾り弓矢を設けたり、鳴弦(めいげん)の儀と称して、神職がこの方向に向けて弓の弦を打ち鳴らす所作を行います。

その二 厄払いのはなし

神社のあれこれ その一

やくばら 厄払いのはなし

厄年の年齢にあたる方は、災難にあわないように神社に参拝し、厄除けのお祓いを受けます。
厄年の年齢は、社会的にも転機を迎えることが多く、体調も変化しやすいため、昔から慎むべき年とされてきました。



まめちしき
豆知識

厄年には、神事など社会的に重要な役割を担うため、「役年」ともいわれ、通婚などと同様、祝いの年でもありました。厄年の年齢は生まれた時を一番とする数え年で、男性が25、42、61歳、女性が19、33、37歳とされます。その前後の年をそれぞれ「前厄」、「後厄」といいます。

その三 絵馬のはなし

神社のあれこれ その二

えま 絵馬のはなし

絵馬は、神様をお願いごとをするときに本物の馬を納めたことにはじまります。馬はむかしから神様の乗り物とされてきました。
ご祈願を書いた絵馬は、神社の絵馬掛けにつるします。



まめちしき
豆知識

絵馬は奈良時代からあったようですが、室町時代には専門の商家が描いた大絵馬が盛衰し、馬以外の武者や歌人も描かれ、産業するための絵馬殿も作られました。また、一般の絵馬師や修繕者が、祭礼の様子や干支を描いた小絵馬も生まれ、今に引継がれています。



きーこ

「初宮詣のはなし」、「手水のはなし」、「安産祈願のはなし」と続きます。あたしも出演してゐるんですよ。むふふ。

先人の祈りの跡をたどって
シリーズ祭祀遺跡

鳥越道臣

第五回 高良山神籠石

こうらさんこうごいし



福岡県久留米市、筑後国一の宮高良大社こうら
が鎮座する高良山の中腹に、「高良山神籠石」と呼ばれる古代遺跡がある。

高良山神籠石とは、幅一〜二メートル、高さ・奥行一メートルほどの巨大な切石を、高良大社参道にある馬蹄石を起点として、西側にある五つの峯を繋ぐように列に配した、全長約一・六キロメートルの列石遺構のことである。

列石は、本来「八葉の石畳」と呼ばれ
たまたれう
（『高良玉垂宮縁起』）、磐座である馬蹄石を「神籠石」と呼んだが、江戸時代中期の頃より、このふたつが混同して呼ばれるようになり、明治三十一年、小林庄次郎によって「筑後高良山中の神籠石なるものに就いて」として学会に報告されてからは、列石を「神籠石」と呼ぶようになった。

小林は、この論文で「高良山神籠石は神聖な靈域を区別したもの」と考え、「靈域説」を主張したが、明治三十三年、八木奘三郎が「城郭を除いては、他にこの類の大工事なかるべし」として「城郭説」を主張し、以降、学会で「靈域説」と「城郭説」が対立する、いわゆる「神籠石論争」が展開されることとなった。

しかし、昭和三十七年、佐賀県武雄市でおつぼ山神籠石が発見され、翌年に発掘調査が行われると、石列が版築で築かれた土塁の基底部に連なることや、列石の前面に三メートル間隔で並ぶ柱穴の痕跡などが確認され、さらに谷部においては、通水のための水門や、掘立柱建物で造られた城門なども発見され、これらにより、神籠石が城郭であることが確定的となった。

現在、神籠石は、『日本書記』にみえる「大野城」や「基肄城」などのように、国家防衛を目的として西日本各地に築かれた、史料に登場しない、古代山城のひとつと考えられている。

* 版築：土壁や土壇の築造法。板で枠を作り、一層ずつ杵で突き固めるもの。



【参考文献】

「高良山神籠石」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』
第五輯、福岡県、昭和五年三月

授与品紹介

健康守り

皆さまの心と体の健康を
ご祈願しました。



沖縄の伝統工芸「紅型」の柄を参考に。
草花をピンクと水色の糸の濃淡で表現
し、純白の地に帯状にあしらいました。



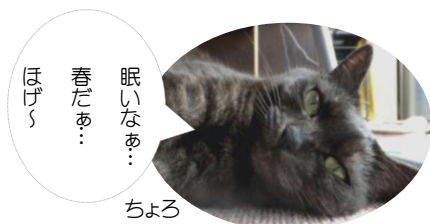
輝くような山吹色にふく
やかな巾着型。もこもこ
と元気な山並みを描きま
した。

安産守り

無事にお子様を出産されますよ
う出産後も母子共に健やかに過
ごせますようご祈願しました。



社務猫のつぶやき



眠いなあ…
春だあ…
はーっ

ちょろ



おー桜！
はーっくしょん！
ぶー…あたし花粉
症
きーこ

編集後記

いよいよ第五号。ご執筆頂いた方々のす
ばらしい原稿をお預かりして、ようやく発行の運びとな
りました。ありがとうございました。春夏号ということ
で桜から紫陽花、夏越の大祓、「夏歌」では夏の終わり
や回想まで盛り込んだ内容になりました。過ぎゆく季
節、やってくる季節を感じながら読みただければ幸
いです。◆われわれが行う神事には、古代からの思想や
行為がずっと思っているのだと、源流を探る旅はとて
も興味深く、それでいて心奥が震えるような感動を覚え
ました。神話の力には不思議なもので、時折、神々の心情と
われわれとが呼応するような感覚にとらわれます。特
集の「神話と大祓」では、現代と神話の世界のつながり
や言葉の奥深さなど感じて味わっていただけとは思ひ
ます。抜粋した『古事記』の文章など、音読していただ
くのもよいかもしれません。◆さてこの初春に宮城県仙台
沼市のお宮を参拝してまいりました。唐桑半島には初め
て参りました。震災から四年が経ちましたが、皆さんの
暮らしの復興もまだまだゆえ、お宮の復興はその次、五
年、十年先になる、というお話がありました。氏子さんの
数が減っていくお宮ではさらに厳しい状況であるとのこ
と。復興までの道のりは長く厳しく続いていくのだと感
じる場が多々ありました。また、そんな状況下でも、お宮
や土地に伝わる、様々な信仰の形と心を地道に守り続け
ている神職の方々や土地の方々との出会い、尊い学びをい
ただきました。豊かな信仰文化を育んだ唐桑の自然、美
しく険しい海や風も忘れがたいです。◆今年も、弥生神
社では総代の皆さま、地域の皆さまのお力をいただき、
無事に御例祭を迎えることができました。感謝の気持ち
を心に御奉仕して参ります。皆様もぜひいつまでもご参
拜ください。

(権)

編集・発行 弥生神社

海老名市国分北 一・一三三三